

法華經を広めるための涙

布教部長 村松潮隆

絵 藤田由也

鳥と虫とはなけ(鳴) どもなみだをちず、日蓮はなかねどもなみだひまなし。此のなみだ世間の事にはあらず、たゞひとへに法華經の故なり。若しからば甘露のなみだとも云つべし。涅槃經には父母、兄弟、妻子、眷属にわかれ(別)て流すところのなみだは、四大海の水よりもを、し(多)といへども、仏法のためには一滴をもこぼさずと見えたり。法華經の行者となる事は過去の宿習なり。同じ草木なれども仏とつくらるるは宿縁なるべし。仏なりとも権仏となるも又宿業なるべし。

【語句の意味】

なみだひまなし 涙に途切れがない。涙が止まら

ない。

たゞひとへに 他のもはなく。ただ一つ。

故なり 原因である。

若しからば もしや、そうであるならば。

甘露 甘い露。神々の飲料水で不死の霊薬。

云つべし 言えるだろう。

涅槃経 大般涅槃経の略。釈尊の入滅の前後を記

した経典。(後記で説明します)

眷属 一族・親族。仏・菩薩につき従う者。ここ

では従者・腹心の者。

にわかれ (別) ・・と別れて。

四大海 仏教の世界観で、世界の中心にある最高

峰の須弥山の四方にある海。

仏法 釈迦様の説いた教え。

見えたり 見えている。思われる。

過去の宿習 前世からの習い・決まり。前世の

考えかたや行いが現世に影響を及ぼしてい
る事。

宿縁 宿縁なるべし 前世からの因縁であろう。

仏なりとも 釈迦様であつても。

権仏 「権教の仏」の略。仮の仏。対するは「実

教の仏で法華経の本仏」。

宿業 現世の状態を招く原因となつた前世の行

為。

なるべし ・・であろう。・・であるはずだ。

【現代語にしてみる】

鳥はそれぞれの囀りを奏で、虫もおの音色を

奏でて鳴きますが、鳴いて涙を流す事はありません。

日蓮は、鳥や虫のように声に出して泣くよう

な事はありませんが、涙が途切れる事はないので

す。先ほど言ったように釈迦様から与えられた

使命を有難いと思うにつけても涙、大難に遭つて

居ることを考えても涙、未来の果報である成仏を

想像しても涙が流れますから、涙が止まる暇があ



りません。この涙は、世間一般の苦しい・悲しい・辛い・痛い・嬉しい・と言うような涙ではありません。ただ偏に法華経を、この国に広めんがための涙ですから、天人天女たちが飲み、不老不死が得られると言う甘露と言えるでしょう。

涅槃経には「父母や兄弟、妻子や眷属と別れる寂しさや辛さ、悲しみで流される涙は、大海の水よりも多いけれど、仏教を広めるためには、ただ一滴の涙も溢こぼされたことがない」と述べられています。

日蓮が法華経の行者となったのは、前に述べたように過去世からの決まり事です。

例えば同じ草木でも、仏像の姿に造られることは稀まれであり、草木の前世の因

縁によるとしか言いようがありません。

また同じ仏像でも権教の仏像になる物もあれば実教の仏像になる物もある。これも又、前世の行いに因るものではないでしょうか。

【涅槃經について】

涅槃は、一般的にお釈迦様の死を意味する言葉として使われますが、本来煩惱から解放された悟りの境地を意味します。涅槃經には、小乗仏教と大乘仏教、二つの涅槃經が存在します。

小乗仏教の涅槃經では、お釈迦様の終焉の状況が歴史的に語られています。小乗仏教での涅槃の捉え方は、燃えさかる煩惱の火を吹き消して悟りの智慧を完成した境地とし、その境地には有余涅槃と無余涅槃の二つが有るとします。

有余とは、余りが有ると書き、煩惱が残っている不完全な悟りと言う意味です。精神的に煩惱は断ち切ったけれど、迷いの根源である肉体が残っている悟りです。無余は、余すところが無くなった

事で肉体も無く、精神のみの完全平安な境地です。

一方、大乘仏教では、お釈迦様の死をふまえ、教えをより深いものにして、お釈迦様の永遠の存在を明らかにするために、八万法蔵と言われる数多くの経典が作られました。そして最終的に法華經を頂点とし、大乘經典の総結びとして涅槃經が著わされました。

大乘仏教での涅槃の捉え方は、無為涅槃といい、苦・束縛・煩惱などの迷いから完全に解放されて常・楽・我・淨（四徳）の心境が開けた境地です。

常は、永遠であること。楽は、安楽であること。我は、絶対であること。淨は、清淨であること。

そして無為は、生滅変化をしない永遠不変の状態を言い、それを最上とします。四徳を具えない小乗の悟りは、生滅変化しますから有為涅槃としています。常・楽・我・淨、四徳の境地は、人類の理想として万民が心の中に仏性（仏種）として具えているものです。

— 続く —